

## 雜 錄

### 公孫樹支那古記録

小泉源一

公孫樹屬 (*Ginkgo*) は中部侏羅紀に現はれて現世まで生存しつゝあるが、今之に極めて近似せる *Ginkgoites* 屬を以て本類とすれば、其出現は三疊紀の末世 Rhaetic となる、公孫樹 (*Ginkgo biloba* L.) に極めて近似せるものは *Ginkgo adiantoides* (UNGER) HEER にして中部侏羅紀に Spitzbergen より西比利亚の Lena 河口附近まで一帯の邊に現れ白堊紀より第三紀には北半球に廣く分布し、日本では樺太まで及んでゐる、公孫樹と *Ginkgo adiantoides* とは外部形態にては絶對の區別はなし難く、唯葉の解剖上の形態に少許の差を示すに過ぎず、故にかゝる少異を除外して同一種とすれば、公孫樹は中部侏羅以來北半球に廣く分布し第四紀に入りては黒龍江口の Bureja 河口の洪積世に生存し沖積世には支那中部に餘命を保ちしが、いつの頃にや山地には全く絶滅して唯人為栽培により生存するのみとなつた。

然し公孫樹と *Ginkgo adiantoides* を以て全く別種として取扱ふならば公孫樹の眞の化石は或は此後支那内地に於て發見され、現今の如き葉の解剖上の特徴を備ふるものが、いつの世以來現れたと云ふ事も明になる日もあらう。

公孫樹は支那中部の山地に自生してゐたものである事は考へらるゝも、いつ頃まで自生品があつたのか其邊の古記録は全く支那になく、京都大學名譽教授新村出先生は其著東亞語源志に於て次の如く述べられてある。

イテフといふ木は、支那に於ても古く文獻にあらはれてゐない。文選の吳都賦に別名で出てくるといふ學者もあるが、従ふことが出来ない。宋以前の書にはイテフはあらはれてゐない。唐の世の話として傳はつてゐるものもあるけれど、唐の世の文獻に載つてゐない。元は江南に特有な植物で、それが江北地方に傳はつたのは宋以後である。宋の詩文に徵證が多く見えてゐる。北宋末期から詩や畫にあらはれ来る。それから南宋にかけての詩人はよくその銀杏果を詠じた。蘇東坡や黄山谷、梅聖俞や歐陽修、陸放翁や陳後山、そのほか秦少游などの詩にもよまれてゐる。それも鴨脚葉でなくて鴨脚子すなはちその果實が題材となつてゐる。葉のことは極く稀にしか出て來ない。南人の鴨脚と北人の胡桃とを對照し、北人がこの南果を珍重する趣は詩人がよくそれをよんだものだ。畫の題材としては、宣和畫譜に、銀杏白頭翁圖といふのと、寫生鴨脚圖といふのとこの二圖が擧げてある。また日本の傳説にしばしば聞く所の枝などを

地にさしてそれから樹木が生長したといふ話で、それがイテフの枝のことになつてゐるのが宋の天子高宗が南渡の途中に浙江省の崑山縣の貞義里といふ或村で、宮臣の一人が、イテフの枝を地面にさして、若し此の枝が土に着いて活を得るならば自分はここに居らうといつた所が、その枝が段々生長して大樹となつて繁茂した。といふ傳説が崑山縣志に載つてゐる。さういふ様にイテフは宋から聞えて、詩文や畫題をはじめ傳説や逸話にも續々あらはれてくるが、本草書にはまだ録せられてなかつた。銀杏が本草に載りはじめたのは、元の李東垣の食物本草、同じく吳瑞の日用本草からであつて、宋の世に著名な二三の本草書には未だ登録されなかつたのである。

食物本草によれば、古名が鴨脚樹であつて、當代には銀杏の名が通稱であつた。元以前でも恐らくはさうであつたらうと思ふ。元のころ既に白果とか白眼とか靈眼とかいふ名また仁杏といふ異名もあつた。生殖の神秘に關する觀察の如きも既に蘇東坡の物類相感志に見えるが、この著が果して東坡のものであるか否かは不明であるにしても、この植物が東坡時代によく知られたといふ反映にはなるであらう。

イテフは支那に於ては其葉形によつて鴨脚と名づけられ、其果の色によつて銀杏と呼ばれた。其他後世の異名であるが、公孫樹とも云はれる。イテフの種子は老木でなければ出来ないから、孫の代に實のると云ふ意味でつけられたのである。字音として公孫樹と云ふ文字は佳い。日本では銀杏をギンナンと支那の近代音を音便で呼んでゐる。イテフと云ふ語は宗代の鴨脚の發音ヤーチャオがイテフと轉訛したものである。

## 本邦の野生菊の新産地

北村 四郎

1) *Chrysanthemum nipponicum* MATSUM. ハマギクが其の南の分布は常陸に及ぶ事は木村有香氏が助川海岸にて 1929 年 II 月 22 日採集されし事により明かとなつた。

2) *Chrysanthemum boreale* MAKINO キクタニギク、アワコガネギク、アブラギク(舊稱)の北への分布は陸前の宮戸島に及ぶ事は 1929 年 II 月 3 日木村有香氏の採集に依り正確となつた。尙この菊は朝鮮、滿洲にも分布すれども北支那に及ばず同地の *Chrysanthemum lavandulaefolium* MAKINO とは區別すべきである事は既に日支の學者に依り近年認められた。

3) *Chrysanthemum indicum* L. アブラギク、シマカンギクが山城に産する事は筆者が今秋京都市内比叡山ケーブルの附近の崖に自生してゐるのを澤山見て確信を得た。

4) *Chrysanthemum japonense* var. *debilis* KITAMURA, セトノギクの自生地大塩附近の